

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：15501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25780477

研究課題名(和文)学級共同体を基盤とした教育方法の基礎的研究 K.G.シャイベルトに光を当てる試み

研究課題名(英文)Historical study on class teaching - focussing on K. G. Scheibert-

研究代表者

熊井 将太 (Kumai, Shota)

山口大学・教育学部・講師

研究者番号：30634381

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果は、従来、大きな注目を浴びてこなかったK.G.シャイベルトの業績を評価したことにある。その評価の点は、K.G.シャイベルトは新教育運動以前に学級を共同体として組織することの必要性を認識していたということにある。従来、個人主義、画一的と評されてきた旧教育の時代においてすでに学級への注目が開かれていたことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The result of study is evaluating K. G. Scheibert's achievements in the history of class-teaching. K. G. Scheibert recognized the educational significance of "Classroom-management" before Reformädagogik.

研究分野：教育方法学

キーワード：教育方法 教育思想

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、研究開始以前より近代の教授学説史の中で、「学級の教育力」を生かした教育実践がどのように構想されてきたのかを歴史的に研究してきた。学級組織は、近代学校教育の実践基盤であり、教育方法の改革は常に学級組織の改革と結びついて議論されてきた。だからこそ、これまでの教育学研究においても重要な研究対象として繰り返し取り上げられてきた。とりわけ学級崩壊や荒れといった問題の中で学級をあらためてどのようにとらえられるのかが問われはじめた 1990 年代から、習熟度別学級や多様な集団の弾力的編成が求められ、学級の自明性に批判的なまなざしが向けられた 2000 年代以降はその傾向が顕著である。

その際、学級の問い直しを進める上で重要な論点となってくるのが、「コミュニタリアニズム（共同体論、共同体主義）に対する評価」（久田 2007、17）である。学級がこれまで教育方法研究の重要な対象となってきたのも、学級が単なる制度組織にとどまらず、それ自体が教育力をもつ「共同体」として捉えられてきたからであり、同時に今日の学級再編の議論の焦点もまた学級のもつ共同体的性格に向けられている。

そもそも、学級とはその成立史を遡れば、段階的に区分された教育内容のある程度同じ学習条件を持つ子どもにまとめて教えるために創出された組織である。教育課程の編成単位であった学級という組織に、教育方法の歴史的発展の中で「作業共同体」あるいは「生活共同体」としての意味が付与されていたのであり、その主要な契機となったのが新教育運動（改革教育学）による「旧教育」への批判とその超克の試みであったことはよく知られている。換言すれば、「旧教育」における教授と管理のための学級理解から「新教育」における教育的共同体としての学級理解への転換という歴史図式である。

しかしながら、こうした単純な歴史図式には再考が求められる。なぜならば、従来、「共同体(Gemeinschaft)」の教育力を発見したと評されてきた新教育運動（改革教育学）に先んじて、「教師中心主義」、「管理主義」と断罪されてきた「ヘルバルト派」においても類似的な構想が存在していたこと可能性が考えられるからである。シュトイ(Stoy, K. V.)、ツィラー(Ziller, T.)、ライン(Rein, W.)、デルプフェルト(Dörpfeld, F. W.)といった著名な「ヘルバルト派」の論者たちのもそれぞれに力点は違えど、学級の共同体的性格や集団性を活用する構想が見受けられる。そして、その構想に影響を与えた人物として、そして理論的・実践的に極めて精緻に、学級共同体を基盤とした教育方法の構築を構想していた論者としてシャイベルトの存在が浮かび上がることとなった。

2. 研究の目的

研究の目的は、19 世紀プロイセンの教育実践家・教育思想家であるシャイベルト(Karl Gottfried Scheibert: 1803-1898)の学級共同体形成論の構造と特質を明らかにすることで、従来の教育思想史、教育方法史において看過されてきた「学級教育の忘れられた歴史」に光を当てることにある。

本研究で焦点を当てたシャイベルトは、19 世紀半ばプロイセンのシュテッティーン(Stettin)の高等市民学校(höhe Bürgerschule)の校長であり、ラインが編纂した『教育学百科事典』において「ヘルバルト派」の一人に数え入れられている人物である。彼の教育方法論の最大の特徴は、学校教育において「授業(Unterricht)」が支配的な時代において、授業と並ぶ概念として「学校生活(Schulleben)」を構想し、児童生徒が共に生活をする中で訓育(Erziehung)が行われる施設として学校を改革しようとしたことにある。シャイベルトは、ギムナジウムをはじめとする当時の学校が、実際の生活や行為から遊離した知的な訓練に傾斜していたことに強い批判意識を持っていた。それに対して、現実の社会生活の中で、よりよき「市民」となるために、実践的・道徳性、公共性(Gemeinsinn)、主体的判断力を育てる必要があると考えたシャイベルトは、学校の中で、実践的にそれらを訓練する場・機会を作り出すことを企図したのであり、それが学級を基盤とした「学校生活」であったのである。

シャイベルトに関しては、日本においては雑誌『教育評論』の編者として名前が取り上げられる程度であり、ドイツにおいても、20 世紀初頭に労作学校の先駆者として注目を集めて以降は決して評価されてきたわけではない。「学校生活」の発見者として、あるいは近年になって社会的教育学の領域や新教育運動の「前史(Vorgeschichte)」として再評価が行われつつあるが、そこでも学級史という視角から検討が行われているわけではない。

本研究では、シャイベルトの学級共同体形成論に焦点を当て、シャイベルトが「いかに学級を共同体として形成しようとしたのか」および「共同体としての学級の教育力を活用するという構想はどのような教育思想に支えられていたのか」を検討し、従来の教育思想史、教育方法史において看過されてきた「学級教育の忘れられた歴史」に光を当てることを試みた。

3. 研究の方法

研究を進める中心的な方法として、文献の収集と講読という方法をとった。まず、初年度には、ドイツへ渡航し、日本では収集困難なシャイベルトの著書、およびシャイベルトの論者が掲載されている雑誌を複写、講読した。続いて、翌年度には、収集した文献の講読を中心に進め、国内の学会（日本教育方法学会第 50 回大会：自由研究発表「近代教育

方法史における学級共同体論の形成と展開 (K.G.Scheibert に光を当てる試み)で学会発表および論文投稿を行った。

4. 研究成果

本研究で得られた成果は以下の通りである。

シャイベルトの学級共同体形成論は、授業における集団思考、祝祭や生徒クラブの運用など、共同体の教育力を活用する実践を意図している。もちろん、学習者相互の教え合いは中世のイエズス会学校やコメニウスの教授学にも見出されるものであるし、学校生活という構想もすでにフレーベルや汎愛派の実践に存在していたように、決してシャイベルトの独創というわけではない。しかしその一方で、授業や学校生活を展開するにあたって、その実践基盤としての学級の意義を承認し、「個々人がそこに埋没するのではなく、群集の中で本質的な構成員として自らを認識できるように、群集が組織される」(Scheibert1850)ように学級を教育的意図をもって「組織」するという課題を明示した点において、シャイベルトの構想は学級経営・学級指導の必要性を本質的に承認したものであると評価することができる。このような学級共同体構想は後にシュトイ(Stoy, K. V.)、ライン(Rein, W.)、ヴィルマン(Willmann, O.)らによって高く評価され、実践化されていくとともに、それを経て間接的ながらもリーツ(Lietz, H.)やペーターゼン(Petersen, P.)らの生活共同体論に影響を及ぼしていくこととなる(熊井2011)。シャイベルトに注目していくと、これまで採用されてきた、「ヘルバルト派=教授と管理の組織としての学級 改革教育学=生活と学級の共同体としての学級」といった図式はさほど明確なものではなく、むしろヘルバルトを起点としヘルバルト派を経て改革教育学へと繋がっていく学校生活論の系譜が明らかになる。シャイベルトの学級共同体論はその媒介項としての役割を果たしているとは評価することができる。

しかし他方で学級の集団的性格の内実に入り込んでいくと非連続性もまた明らかになってくる。中世の学校やコメニウスの教授学に見られた学級観においては、学級は互いに刺激し合う競争的共同体として認識されていた。なぜなら、名誉心によって競争し合うことと励まし合うことは何ら矛盾するものと捉えられておらず、「自由と競争との幸福な結合」がその集団観の根底には存在していたからである。それに対してシャイベルトの構想は、市民社会における協会、連合、組合、自治をモデルとし、対話と互助にもとづく協力的な共同体を思慕している。後にテニースが家族内生活と家内経済を基調とするゲマインシャフトに対する概念として提起した「商業と大都市生活」に基調をおくゲゼルシャフト的共同体観はシャイベルトに

とっては全く否定されるものではなく、むしろ学級共同体のあるべき姿として位置づけられうる。教育実践上の方法に着目するならば、シャイベルトの自由な授業形態や学校生活は後のイエナ・プランや労作教育と高い類似性を示しているが、その基盤となる学級共同体の捉え方については一線を描くものであったと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

熊井将太「『脳科学に基づく教育』の批判的検討」『山口大学教育学部 研究論叢 第3部』第64巻、2015年、55-68頁、査読無。

〔学会発表〕(計 1件)

熊井将太「近代教育方法史における学級共同体論の形成と展開 K.G.Scheibert に光を当てる試み」日本教育方法学会第50回大会(2014年10月12日 於 広島大学：広島県東広島市)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

熊井 将太 (Kumai, Shota)

山口大学・教育学部・講師

研究者番号：30634381

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：